



今日の聖書本文: 申命記1章 29-33節 / 暗唱聖句: ローマ人への手紙8章15節

説教者: 鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！一週間も神様からの霊的な平安を保って歩むことができましたか。また今日の主の礼拝に集ったみなさんの上に豊かな神様の霊的な平安が注がれ、みなさんの心に神の平安が豊かに注がれますように切にお祈り申し上げます。

<1. 力にあまる荒野の旅>

最近毎朝教会の早天祈り会では出エジプト記を共に学び、黙想しています。今日の御言葉は出エジプト記の内容とつながっている内容です。イスラエルの民がエジプトの奴隷の悲惨な生活から解放され、荒野に入ってから最初1年ぐらいいている時の内容です。その時モーセ(神様の人、イスラエルの指導者)が1年間の荒野の旅を振り返って見ながら神様の御前で告白した内容が今日の本文です。

モーセからはじめ約200万人のイスラエルの民たちは神様の約束の地に入るために40年間荒野を通過しなければなりません。苦勞して来たイスラエル民にもうすぐ祝福されていたすべてが豊かな肥沃な地が待っていました。しかし、そこに着く前に彼らが通らなければいけない砂漠のような荒野がありました。荒野では飲もうとしても水もなく、食べようとしても食べる物もなく、かんかんと照りつけるひざしのためすべてが渴いた死の谷でした。モーセもこの荒野を“**大きな恐ろしい荒野(申命記1:19)**”だと表現したように、実際荒野は多くの危険と恐怖が隠されていたところであったことが分かります。

旧約聖書出エジプト記15章を読んで見ると、荒野でイスラエルの民たちがモーセに何も飲むものがない！とつぶやいたり、次の16章には、荒野でパンと肉を食べれなかったことにイスラエル民たちがまたつぶやきながら叫んでいる姿が見えます。そして、17章にも飲める水がなくて渴いた民がモーセと争いながらつつくします。動物もつぎつぎとたおれていたかも知れません。たんだんと疲れ、理性を失った民たちはモーセに向かって石投げで殺そうとする状況まで起こってしまいました。みなさん！荒野でのイスラエルの民たちもいかに大変だったのでしょうか。何もない荒野で神様から恵みによって毎朝新鮮なパンのようなマナが、夕食には肉のためうづらが与えられましたが、それも1年間のうちになれてしまったら、毎日同じメニューに飽きていたかも知れません。毎日いつも何日後テントをおりたんだり、またテントをかけた不安定続きの生活の連続だったのでしょうか。一言でまとめると、イスラエルの民たちが経験した荒野での生活は非常に辛い日々でした。

そんな荒野で1年が経った時点のころ、日々が疲れ果てていたイスラエル民の目にはやむを得ずひっぱられる生活のようだったと思います。だから、イスラエルの民たちはモーセが“**あなた方が以前1年間の荒野の生活をするうちに父なる神様の御胸に抱かれて通って来たのよ。**”と言われても信じられなかったのです(33節)。まるでモーセの話は大げさなことばのように、嘘をついているようにイスラエル民は受けたと思われま。

<2. 荒野の生活においてイスラエルの民と違っていたモーセの信仰>

そうしたら、まずはどうしてモーセの場合はイスラエルの民のようではなく違った視覚と心を持つことができたのでしょうか。実はモーセ自身はイスラエル民よりもはるかに苦勞をしながら荒野で一緒にいたのではないのでしょうか。モーセは民たちよりもっと重い重荷おっていたでしょう。80歳の高齢で、2百万人のイスラエル民の責任をもっていた指導者の立場こそ、思い焦(こ)がれる位置だったと思います。

しかし、モーセは荒野の旅程を苦難の旅路として見ず、神様の御胸に抱かれて歩む恵みの旅路として見ていました。同じ状況を見ていても霊的に見ている目が違いました。イスラエルの民はたえずただ目の前にある息がつまる環境のみを見つめていたためエジプトの奴隷の時よりもっと絶望的に振る舞いをするしかありませんでした。しかし、モーセは荒野の40年間を全能の神様、その方が自分たちには父なる神様として歩んでくださっているのを見つめていたのです。

イスラエル民たちは下のことを、つまり、いつも目の前にあることを見つめながら進んでいましたが、反対にモーセは上のこと、つまり、神様とその神様の約束を見上げていたのです。これがまさにイスラエルの民たちとモーセの違いだったのです。

<3. 荒野の中でも抱き締めてくださる父なる神様>

信仰の目で見ていたモーセは荒野の旅を振り返ってみると、抱き締めてくださる父なる神様の恵みなしに出エジプト後の1年間を話すことはできませんでした。今日の本文の31節をみてみてください。“あなたの神、主があなたを抱かれたのを見ていたのだ。”という御言葉を中心に前後の御言葉を調べてみると、モーセは神様について3つの大切な事実を知らせています。

始めに、“あなたがたのために戦われるのだ。(30節以下)”と語っています。

イスラエルの民を抱き締めていままで荒野を通ってきたながら彼らの代わりに戦ってくださったのは父なる神様であることでした。荒野はみなさんもご存知のように、たけだけしい猛獣や、毒の入っているサソリなどが多くてゆっくり休む事も、眠れることもできない所でした。そのようなけわしい環境において神様はいろんな意味で荒野でのあらゆる危険からイスラエルの民を守り、導いてくださったということです。申命記8章15節をみると、“燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、”たと言われています。

二番目に、モーセの告白には荒野の生活に必要なすべてを供給してくださった神様に対する感激が含まれています。

ひもじかった時はマナをくださり、のどが渇いた時は岩から水を出させてくださいました。イスラエルの民が荒野で肉が食べたいと訴えたら肉をくださり、長い旅程においても足がはれないように(申命記8章4節)守ってくださいました。

“あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足ははれなかった。”(申命記8章2-4節)

三番目に、イスラエルの民が荒野で先が見えなかったとき神様は“あなたがたの進んで行く道を示される(33節)”方として荒野の旅を導いてくださいました。

みなさん! 荒野には実際道がありません。砂漠のような荒野で東西南北(とうざいなんぼく)を見分ける事はとってできないことです。神様はそこで昼は雲の柱で日陰をつくってくださり、急速低温化される夜は火の柱であたたかく守ってくださり、さきが見えない荒野の道を導いてくださいました。イスラエルの民は事実、神様による雲の柱と火の柱をとおして一年を過ぎ、今の場所にまでいらせて来れたのです。これらのすべてを黙想してきているモーセにとって神様は荒野の道においてご自分の民を抱き締めるやさしい父として民のただなかにおられる方でした。これがまさに民たちのつぶやきと反逆にもかかわらず、ゆるがないで神様を信頼していたモーセの信仰のもとだったのです。

波乱万丈(はらんばんじょう)の歳月が流れて39年後、モーセが死の直前にした最後のメッセージに移ってみると、その時もモーセは40年間の荒野の中で変わりに戦い、与え、守り、導いて下さった神様を振り替えて見ながら今までの神様は我らの父なるお方であったと告白しています。“主はあなたを造った父ではないか(申命記32章6節)。”このようにモーセは荒野での最後の生涯まで神様は私たちの父であり、ご自分の子を抱き締めてくださる父として信じていました。

みなさん、ご存知ですか。旧約聖書で神様を“父”として始めて呼んだ人はモーセでした。そのモーセは天に召される前までイスラエルの民に神様こそがあなたがたの慈しみ深い父だと強調しました。モーセはこの信仰に変わりはありませんでした。荒野の生活1年目の時も、40年目の時もモーセにとって神様は“子供を愛し抱きしめて共に歩いて下さった慈愛の父、頼りになる保護者”として変わりはありませんでした。そういうわけで同じく荒野の生活をしているなかであっても、つぶやいている民を肯定的な方向に導く事ができたのです。

愛する信仰の家族のみなさん! 今日私たちも生きているこの世の旅路も荒野のように不安定で、あらゆる危険が潜んでいて一寸先(いっすんさき)も見えない道ではありませんか。私たちは天国に入るまでこの世の旅路をしなければならぬ旅人です。この旅路には涙と汗がしみこんでいます。つまらないときもあれば、孤独の時もあり、つらいときもあるこの道がまさに荒野のような人生の旅路だと思えます。イギリスのオクスパード大学のマックグレス教授が書いた[The Journey(旅路)]と

いう本に心にひびく文章があったのでみなさんに紹介します。“人生って短くてさわやかなお散歩くらいだと思ったのに、きちんと準備もされてないマラソン競争に変わってしまった。”

何もわからない若い時はまるで人生はお散歩のように気持ちよく自分の力と意志ですべてが順調になりそうです。しかしもうちょっと人生を歩んで見たら、準備のできないままたえず走り続かなければならないマラソンのような人生であることによく気づくようになります。走り続ける中でどれだけ多くの人が疲れ果ててあきらめてしまうかわかりません。多くの人が絶望に陥ってしまいます。そして先が見えなくて不安になります。これがまさに私たちが歩んでいる荒野のような人生の旅路ではありませんか。

<4. あなたも父なる神様の子供です。>

このような荒野の道を走っている私たちがモーセの目で神様を見上げるならどうなるでしょうか。聖書は私たちにこう語っています。申命記8章15節後半から17節をどなたが読んでくださいますか。“堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それはあなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった。あなたは心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ。」と言わないように気をつけなさい。”

愛するみなさん! 実際、私たちは旧約時代を生きていたモーセたちよりさらなる祝福を受けている事実を知っていますか。なぜなら神様が私たちに愛してくださる父となる事実をモーセが知っていたより私たちがもっとくわしく知っているからです。イエス様はこの世にいられて私たちにしてくださったことは何でしたか。イエスキリストが私たちのためにしてくださったことの一つは神様が私たちの父である事を教えてくださいました。そして神様がどんな方であるかをみずから見せてくださいました。“わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ14:9)”ですから私たちが父なる神様を見たいならマタイの福音書からヨハネの福音書まで4つの福音書をひらいてイエス様がなされたことと語られた事などを黙想すればわかります。マタイの福音書7章11節、“あなたがたは、悪いものであっても、自分の子供には良いものを与える事を知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましょう。”ここで神様をだれだと言われているか。あなたがたの“父”だと言われています。

これを私たちに教えてくださいました方は誰ですか。イエスキリストです。イエス様の以前の時代に生きていたモーセはこのような教えをいただきませんでした。しかし私たちは確実にわかるのではありませんか。イエス様はこの世におられる間、日々神様にむかって“アバ、父”だと呼びながら生きてきました。ヨハネの福音書17章はイエス様がこの世を離れる直前に弟子たちに告別の食事をされ、弟子たちのために祈られた内容が書かれています。ここでイエス様は神様を39回も“父”と呼びました。私たちはこのようなイエス様の姿をとおして神様が私の父となられることを教えられます。

“(イエスキリスト)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネの福音書1章12節)”と主は言われました。これはつまり、神様が私たちの父となる‘子供としての特権’をくださったということです。

愛するみなさん! 忘れないでください。私たちはイエスを信じると同時に神様を父と呼ぶものになりました。“あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、『アバ、父』と呼びます。(ローマ8章15節)”私たちが神様を信じてから受けている恵みはどれだけ大きいでしょう。!礼拝を始めながら私たちは使徒信条をもって 信仰を告白する時、”我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず、” その神様が私たちの父となることを日々告白できますようにお祈り申し上げます。イエス様が教えてくださいました主の祈りを暗唱する時の“天にまします我らの父よ。”を我々は実際に告白することができます。なぜなら、私たちは神様の子供とされる特権が与えられているからです。これこそすばらしい特権ではありませんか。

<結論: 父なる神様に抱かれ、共に日々歩んで行きませんか。>

もうすぐ家庭の月である5月になりますが、こんにち我々の中でもこのように言う方もいるかも知れません。“私は父が抱いて

くれたことは一度もない。母から愛していると聞いた事も一度もない。”それが今だに傷となって親を思い出すと旨が冷淡(れいたん)になることばかりの方もいるでしょう。私もそうでした。“今まで一度も親から抱かれた事がない親をどうしてあたたかく受け入れる事ができるのでしょうか。”愛しているのだと一度も言ってくれなかった親からどうやって愛の父なる神を感じる事ができるのでしょうか。

しかし、愛するみなさん！我らの父なる神様はご自身の愛を通して、そんな私たちを抱きしめながら癒そうと、回復しようとしておられます。そしてかならず変えてくださいます。聖霊様は私たちをその傷から、かわいた生涯から出てくるようにと私たちを導いてくださいます。私たちの時は経験できなかつたわけで、ほかの人にも抱く事のきかない私たちを抱き締めてくださって、私たちもそのように愛を知り、分かち合う事のできる者になるよう助けてくださるのです。実際、私もそのような経験をしましたので今牧師としてみなさんの前で立つことができました。

みなさん!人間は抱いてあげると体と心がもっと元気になるということはすでに医科身体学会をとおして知られている事実です。これは ただ私たちの肉体だけでしょうか。私たちの心も、たましいも同じく該当する原則です。だれがけわしいこの世で心の平安をもって生きるのでしょうか。だれがこの混雑している世のストレスから自由になれるのでしょうか。だれが恐れずに堂々と問題を克服していけるのでしょうか。それは父なる神様から抱かれることを経験しながら歩んでいる人々だと信じます。

聖書には多くの命令が出ていますが、そのなかで一番たくさんされている命令は“恐れるな”という命令です。

今日申命記で大切な時、モーセはイスラエルの民に繰り返して“恐れないでいなさい”と命令しました。なぜでしょうか。

神の子供は一人ではなく、神様の広いむねに抱かれて荒野を歩く人だからです。一度私について話してみてください。

“私は父なる神様に抱かれている人だ。！私は神様から愛されている子供だ。！我が魂よ。恐れるな。！”

神様はみなさんの天の父なるお方です。我らの父なる神様がみなさんを今も抱きしめて下さっています。そして荒野のような人生の道のりの中かならずみなさんを導いてくださいます。そして、父なる神様がみなさんに必要なことを与え、生かされるように助けてくださいます。そして様々な戦いのある荒野のような生活の中で父なる神は戦ってくださって勝利へ導きいれてくださいます。最後まで神の子ともたちを孤児のようにさせず、捨てず、ついに永遠の御国、天国に着く時まで父なる神に抱かれて歩ませるようにして下さり、あの御国で父なる神様とともに住むようにして下さいます。この恵みをみなさんの人生の現場において味わい、体験される全クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族となりますように主イエスキリストの御名によってお祈り申し上げます。アーメン!